

●子どもの心 「二つの消しゴム（自我）」

「えーん、え〜ん。」「どうしたのよ。なんで泣いているの。」

奥の部屋で、小学2年生の男の子が大泣きしています。

「ぼくの宿題の漢字ノートに赤鉛筆で落書きされた。これじゃ、宿題できないよう。」
どうやら、小さい妹に、宿題のノートの初めから終わりまで、赤鉛筆で大きくいたずら書きされてしまったようです。あちこちには赤く太い線が大きく描かれています。

「自分が悪いんでしょ。新しいノートに替えて書けばいいじゃないの。」

「いやだ。先生からのこのノートじゃなきゃ、絶対だめだ。」

「お父さんが帰ってきたら、相談してみようね。」

お母さんはそう言うなり、途方に暮れても、肩を抱き寄せ涙をぬぐってあげました。

「ただいま。帰ったよ。みんな元気でいたかい。」

玄関の方で呼びかける、いつものお父さんの声がしました。お母さんは言いました。

「お父さん、聞いてよ。これこれしかじかで…。まだ文房具屋さんは開いているから、代わりのノートでやればいいのか。それなのにこの子ったら、もう……。」

「そうかそうか。」と少しは驚いたものの、お父さんはぼくのそばに、どっかと腰を下ろしました。そして、ぼくをじっと見たまま、黙って考え込んでいました。

しばらくして、いきなり立ち上がり、「さあ、行くぞ。」と、玄関を飛び出しました。

「お父さん、待って。ぼくも行く。」

あわててぼくも、お父さんの後を追いかけてきました。

それからどれくらいたったのでしょうか、ガラッ。「ただいま。」

帰ってくるなり、急いで、ぼくは奥に駆け上がりました。

その片隅から、古くて重い茶部(ちゃぶ)台を引き出して、部屋の中央に広げました。

「お父さん、用意ができたよ。」と言うと、「よし、始めるぞ。」と声を張りながら、お父さんとぼくは向かい合って座り、落書きされたノートを二人の間に挟みました。

そして、今買ってきたばかりの真新しい二つの消しゴムを、ぼくとお父さんの前に置きました。真ん中には、落書きされたノートの最初のページが開かれました。

「それ、始め！ 力を入れて、ごしごしごしごし……。」

「ぼく、こっちのページを消すから、そっちのページはお父さんだよ。」

「よし、ほら、もう消えてきているぞ。」

ごしごししているうちに、お父さんの方にもぼくの方にも、消しゴムのカスの山が、見る見るうちにできてきました。

ごしごし。いつしかぼくの顔も熱くなってきて、汗がにじんできました。お父さんの広い額も赤くなっています。

「ほら、もう少しだ。がんばれ。」「ぼく、がんばるよ。」「よし、これが最後のページだぞ。」「やったよ。できたよ。落書き消えたよ。」

二人の前には、いつしか消しゴムのカスの大きな山が二つでき上がっていました。

それから、宿題をいつもより意気揚々と難なく終えたのは、言うまでもありません。安心してすやすやと眠る寝顔を間に挟んで、お母さんは、そっと言いました。

「お父さん、ありがとう。」

窓で微笑むお月さまも、お母さんの目頭を伝う一粒の光を見逃しませんでした。

おさひま やかた
(修日真 屋形)

